

【小論文】

1 問題の内容

胎児の染色体異常を判別する新型出生前診断について、その利点と弊害を分析し、実施のための前提条件のあり方の検討を求める問題である。

2 問題の資料の出典

朝日新聞：2012年10月30日，読売新聞：2012年10月5日

毎日新聞：2012年11月14日，12月16日

日本産婦人科医会：母体血を用いた出生前遺伝学的検査に関する検討委員会「母体血を用いた新しい出生前遺伝学的検査に関する指針（案）」への検討要望事項

3 出題の趣旨

- (1) 出生前診断は「命の選別」に直結し、優生思想を拒否する倫理観との間に高い緊張関係を備えることには容易に気付くであろう。しかし、出生前に染色体異常を確定的に判別できる検査技術はすでに存在していたのであるから、出生前診断の技術であるというだけでは新型検査法が高い関心を集める理由の説明としては不十分である。

新型検査法の最も重要な特徴は、その利便性の高さや診断精度の高さにある。また、社会的背景として、高齢妊娠の増加による染色体異常リスクの高まりや「パーフェクト・ベビー」を求めがちな少子化時代の親の願望があり、他方では、商業ベースでの普及を目論む企業の姿勢もある。これを無条件に許容すれば、短時間のうちに社会の隅々にまで検査が普及し、妊娠中絶の飛躍的な増加を招く危険性がある。その意味で、「命の選別」との緊張関係は従来の検査方法とは比較にならず、何らかの歯止めが必要という意見が強く主張されるのは当然である。

しかし、その一方で、先天性疾患のある子を育てる負担を担うのは両親であり、出産に関する自己決定権の問題も無視できない。「命の選別」に否定的な倫理観を社会一般の問題としては承認できても、自分の問題となれば別論であるという「自己言及」の問題にも絡まり、問題を一層困難なものとする。

- (2) 答案に反映すべき問題意識は上記のところにはほぼ尽きる。解答に際しては、このような問題意識に留意しながら、問題文の誘導に従い簡潔に解答すれば足りる。

本問のテーマは社会生活に身近な題材である上、目下活発に報道されており、新聞等を通じて目に触れる機会も多いと思われる。平均的な社会関心と知識の備えがあれば、問題の要点にはさほどの困難なく気づくことができるであろう。また、相当量の資料を引用して答案作成の材料をふんだんに与えているので、知識の不足から解答に窮することも無いはずである。

出題者が求めるのは、問題の要点を資料中からの的確に洞察し、これを簡潔に整理して分かり易く文章に表現する能力である。問われるのは、文章を的確に整序する能力であり、また、その成果物としての文章の説得力そのものである。

以上